

7 感染症対応実践学寄附講座

1. 活動概要

【スタッフ一覧】

● 教授(兼任) 安永 純一郎 (血液・膠原病・感染症内科学講座)

日本血液学会評議員、日本癌学会評議員、日本HTLV-1学会評議員、日本内科学会認定内科医、日本内科学会総合内科専門医、日本血液学会認定血液専門医、日本血液学会認定血液指導医

● 准教授(兼任) 中田 浩智 (感染免疫診療部)

日本内科学会認定内科医、インфекションコントロールドクター(ICD)、抗菌化学療法指導医、日本エイズ学会認定指導医、日本感染症学会認定感染症専門医、日本血液学会認定血液専門医、日本内科学会総合内科専門医、日本血液学会認定血液指導医、日本感染症学会認定感染症指導医

● 特任講師 岩永 栄作

日本内科学会認定内科医、日本血液学会認定血液専門医、日本血液学会認定血液指導医、日本内科学会総合内科専門医

● 特任助教 古田 梨愛

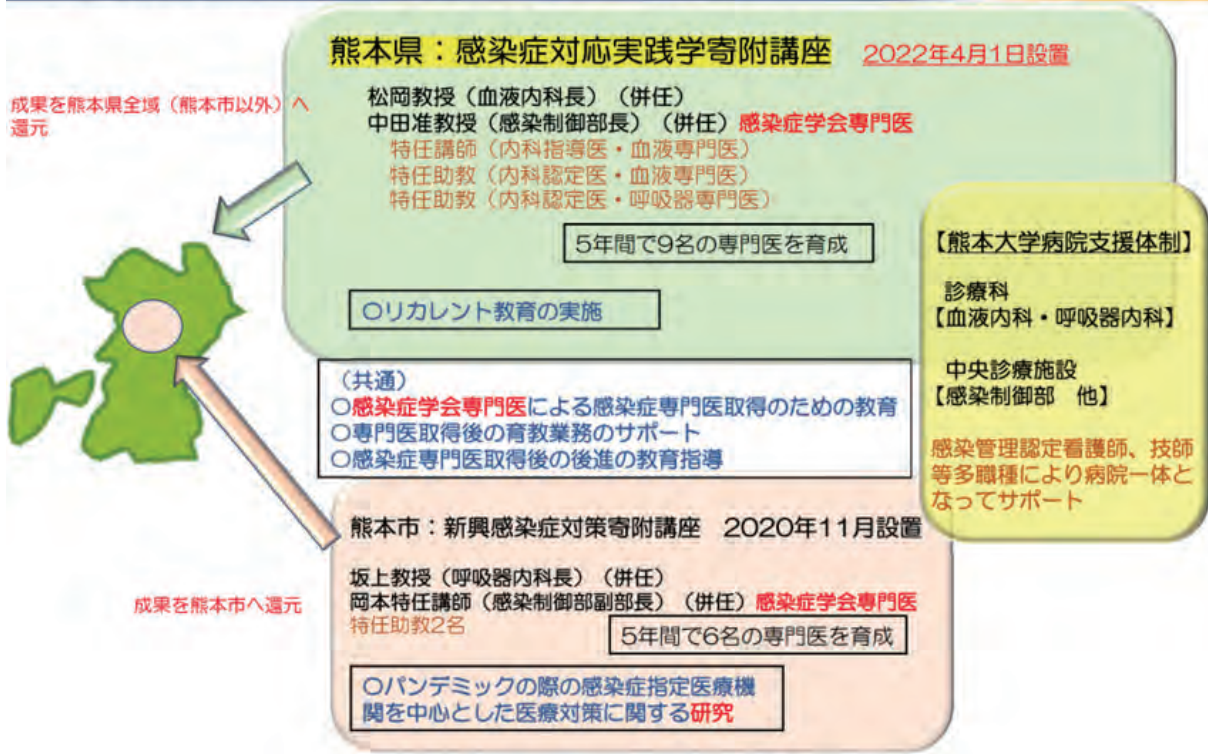
日本内科学会認定内科医、日本医師会認定産業医、日本血液学会認定血液専門医、日本内科学会総合内科専門医、日本血液学会認定血液指導医

(1) 寄附講座設置概要

現在大流行している新型コロナウイルス感染症をはじめ、多くの新興ウイルス感染症が出現し、人類にとって大きな脅威となっています。新型コロナウイルス感染症で実感されたように、人々の移動の高速化により一箇所で発生した感染症が瞬く間に全世界に拡がる時代となりました。

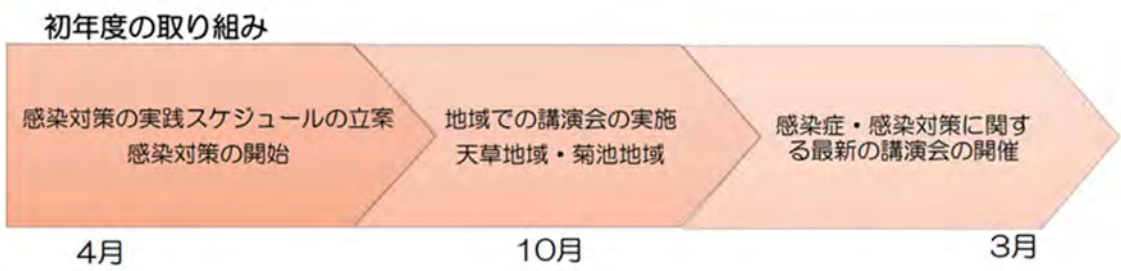
新興感染症や災害時の感染症に対応できる幅広い知識、経験を有する医師・メディカルスタッフが極めて少ない状況であり、これらの感染症に対応できる人材の育成は喫緊の課題です。

本講座においては、熊本県全域で感染症に対応できる医療体制の連携・強化を図ることを目的として、熊本大学病院の感染症専門医を中心に、血液内科や呼吸器内科などの関連診療科及び感染制御部などの協力を得て、病院一体となって、講座運営、教育を行うこととしており、プランとしては、5年間で9名の感染症専門医を育成することとしており、先に設置された市の寄附講座においては「熊本市」へ、県の本寄附講座においては、「熊本市以外の熊本県全域」へ、その育成した人材を送り込むこととしています。併せて、熊本県内の感染認定管理看護師、技師等に対する講演会の開催等、リカレント教育の実践により、県内各地域における医療現場の最前線に立つ医療従事者の人材育成、ひいては、その地域のゆるぎない医療体制の確立へと繋げていければと考えております。熊本大学病院の理念には、「高度な医療安全管理によって、患者本位の医療を実践し、医学の発展及び医療人の育成に努め、地域の福祉と健康に貢献すること」がうたわれており、これらの課題の解決に向けて貢献することは、社会的使命の一つであると考えます。



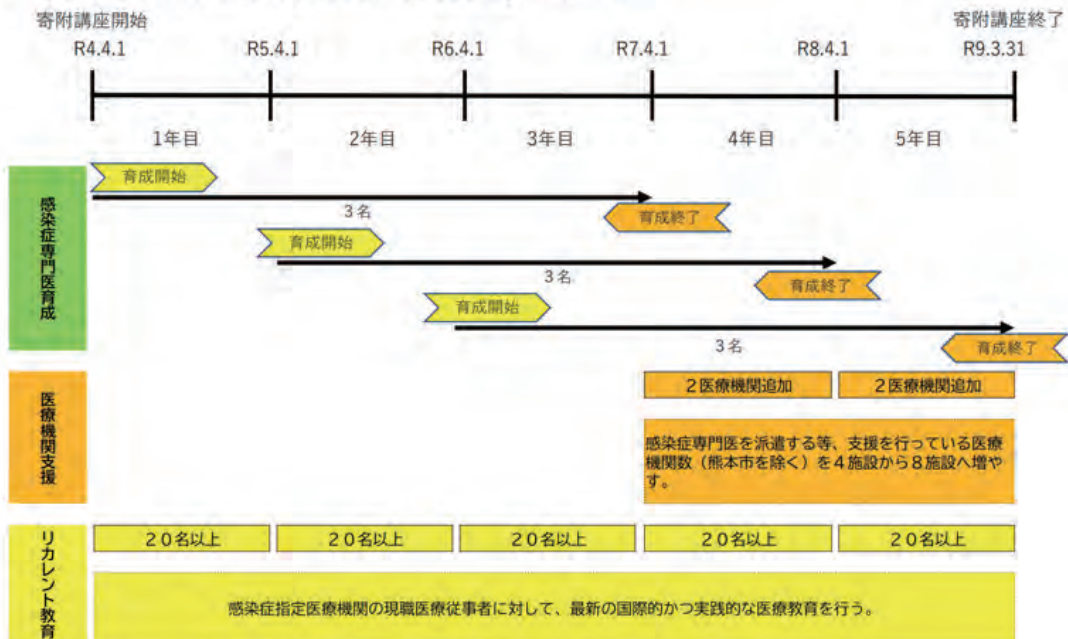
感染症対応実践学寄附講座の4月からの取り組みについて

- 専門医の育成**
- ・ 感染制御部感染症専門医による医師（血液内科、呼吸器内科教員）の感染対策の実践（ICTラウンド、抗菌薬適正使用支援チーム(AST)(Antimicrobial Stewardship Team)での活動）をスタート
 - ・ 3年間の育成期間を経て熊本市を除く熊本県全域へ順次医療人材を輩出、還元
- リカレント教育**
- ・ 感染認定管理看護師、技師等に対する講演会の実施
 - ・ 天草地域（天草中央病院、上天草病院）（9月を予定）、菊池地域（菊池郡市医師会立病院）（10月を予定）開催に向け準備中
 - ・ 「テーマ 新型コロナウイルス感染症と感染対策」



感染症対応実践学寄附講座

【熊本県／感染症対応実践学寄附講座】 ※イメージ図



(2) 熊本県内における感染症専門医および施設認定の状況

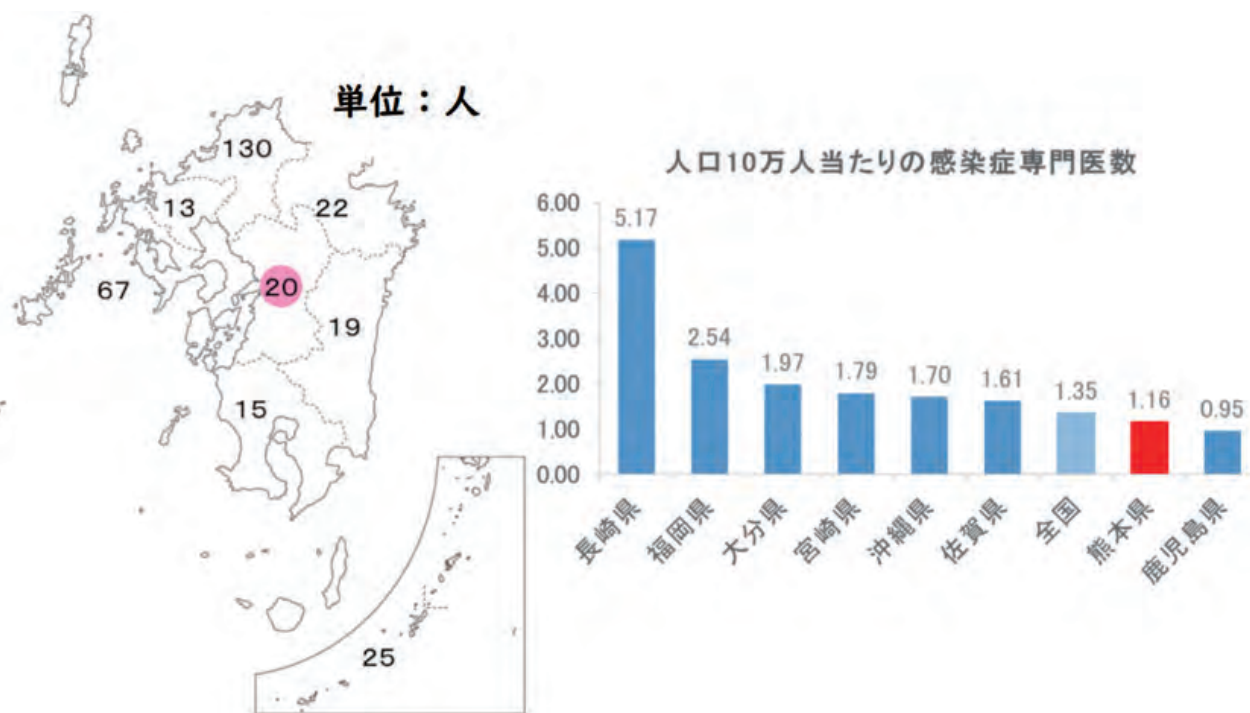
熊本県の感染症専門医の数は全国平均を下回っており、研修を実施できる認定研修機関も限られています。専門医数の1/3は医師経験40年以上であり、世代交代への対応が求められている状況です。人口の約半数を占める熊本市ですら、感染症指定医療機関が1カ所(8床)しかなく、急激な感染症の急増に指定医療機関だけで対応するには限界が懸念されています。



【参考：九州各県の専門医認定者数】

福岡県 130、佐賀県 13、長崎県 67、熊本県 20、大分県 22、宮崎県 19、鹿児島県 15、沖縄県 25

【県内の「感染症専門医」数 令和4年(2022年)4月現在】
 育成人数は、令和4年度6名、令和5年度6名だが、今後増員予定である。



2. 年間活動実績

月	活動内容
通年	<p>【新型コロナウイルス診療】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・重症患者受け入れ、(大学病院 ICU) <p>【一般感染対策】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ICT コンサルテーション (随時) ・抗菌薬適正使用支援チーム(AST)(Antimicrobial Stewardship Team)会議：毎週火曜日 ・院内感染対策チーム (Infection Control Team : ICT) ラウンド：毎週木曜日 <p>【感染症リカレント教育コースの作成】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・(先端ウイルス学コース、院内感染制御コース、災害時感染対策コース) 等の受講・人材育成へむけた動画コンテンツの整備
9月	臨床実習入門「感染対策」(学生向け実習指導)
10月	<p>【令和5年度前期感染症セミナー】</p> <p>開催日時：令和5年10月29日(日) 14時00分～16時00分</p> <p>開催場所：熊本城ホール</p> <p>座長：坂上 拓郎(呼吸器内科)、安永 純一郎(血液・膠原病・感染症内科)</p> <p>演者：岡本 真一郎(熊本大学病院)、岩越 一(熊本市市民病院)</p> <p>テーマ：新型コロナウイルス感染症 ～これまでの総括と今後の課題～</p> <p>内容：① 岡本 真一郎：パンデミックからわかったこと</p> <p>② 岩越 一：熊本市市民病院におけるこれまでの対応と今後の課題</p>

11月	<p>【熊本地域でのカンファ】</p> <p>開催日時：2023年11月16日（17名）</p> <p>開催場所：熊本大学病院</p> <p>対象者：医師・看護師・技師等の医療従事者</p> <p>テーマ：新興感染症に対する講習及びPPE着脱訓練</p> <p>内 容：感染対策指導</p>
12月	<p>【玉名地域での講演会】</p> <p>開催日時：2023年12月15日（約40名）</p> <p>開催場所：くまもと県北病院</p> <p>演 者：岩永 栄作、中田 浩智</p> <p>対象者：医師・看護師・技師等の医療従事者</p> <p>テーマ：感染症への理解と感染対策</p> <p>内 容：① 熊本のHIV感染の状況、② 冬場の感染症と感染対策</p> <p>【球磨地域での講演会】</p> <p>開催日時：2023年12月1日（約15名）</p> <p>開催場所：球磨郡医師会館</p> <p>演 者：中田 浩智</p> <p>対象者：医師・看護師・技師等の医療従事者</p> <p>テーマ：感染症への理解と感染対策</p> <p>内 容：新型コロナウイルスとインフルエンザの最新の知見</p>
2月	<p>【令和5年度後期感染症セミナー】</p> <p>開催日時：令和6年2月4日（日）13時30分～16時00分</p> <p>開催場所：熊本市医師会館</p> <p>座長：坂上拓郎（呼吸器内科）、安永純一郎（血液・膠原病・感染症内科）</p> <p>演者：大曲貴夫（国立国際医療研究センター病院）、尾田一貴（熊本大学病院）</p> <p>テーマ：ポストコロナのAMR対策～熊本のAMR対策を考える～</p> <p>内容：① 大曲 貴夫：日本の新しい薬剤耐性（AMR）対策 アクションプランのめざすところ</p> <p>② 尾田 一貴：抗菌薬適正使用に関わる多面的取り組み ～サーベイランスから個別化投与まで～</p>

【セミナー等の開催】

感染症実践学寄附講座の活動目標として医療者、行政担当者も含めた多職種を対象としたセミナーを年2回以上企画・実施しております。令和5年度の開催実績は以下の通りです。

- 令和5年度前期感染症セミナー：2023年10月29日
テーマ：新型コロナウイルス感染症 ～これまでの総括と今後の課題～
- 熊本大学病院多職種カンファ：2023年11月16日(17名)
テーマ：新興感染症に対する講習及びPPE着脱訓練
- 玉名地域での講演会：2023年12月15日(約40名) 開催場所：くまもと県北病院
テーマ：感染症への理解と感染対策
- 球磨地域での講演会：2023年12月1日(約15名) 開催場所：球磨郡医師会館
テーマ：感染症への理解と感染対策
- 令和5年度後期感染症セミナー：2024年2月4日
テーマ：ポストコロナのAMR対策～熊本のAMR対策を考える～

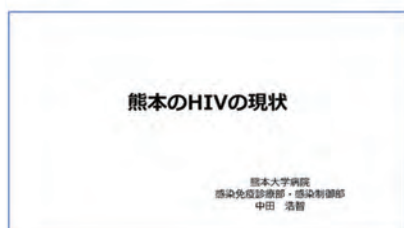
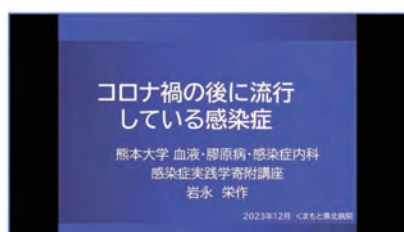
各セミナーの実施概要

- 令和5年度玉名地域感染症講演会(くまもと県北病院)
熊本大学病院 令和4年度 感染症実践学寄附講座セミナー
「コロナウイルス感染症の取り組みと今後の課題」

開催概要：

令和5年12月15日に感染症実践学寄附講座セミナーをくまもと県北病院で開催しました。2演題の講演があり、岩永特任講師によりトピックス「コロナ禍の後に流行している感染症」が、中田准教授より「HIVの基礎と熊本の現状」として最新知見についての解説が行われました。

参加人数はweb聴講を合わせて307名で、医師、薬剤師、看護師、臨床検査技師、臨床工学技士、事務職など周辺機関を含め多職種の聴講がありました。



＜参加者アンケート＞

・あらためて標準予防策を徹底しようと思いました。・HIV感染に対する考え方が変わりました。必要以上に警戒していたと思いました。HIVウイルスも基本的なPPE対応で怖がる必要はないと分かりました。HIVの最新の話が聞かれてよかったです。HIVの正しい知識を得ることで、針刺しや緊急内服への対応を考える時、落ち着いて行動できると思いました。それよりも肝炎抗体を持っておくことの重要性を感じました。自分の感染カードは自分で管理しているので、猛省しました。SARS-CoV-2のN抗体はウイルス表面に対する抗体ではないので、感染防御に関与するのでしょうか？既感染を判断する指標にはなると思うのですが、ありがとうございました。コロナウイルスに関わらず様々な感染症が増えてきているので、自分ができる感染症対策を出来るところから実践していきたい。コロナだけでなくHIVや梅毒など若者への感染症も増えており、検査も時には必要であることがわかった。今後の看護に活かしていきたい。コロナだけでなくインフルやプール熱等々感染が流行しており、予防や対策など理解することは重要なので勉強になりました。コロナは発症前より感染力があり、インフルエンザは発症後感染力があるので、症状が出たら、より一層手洗・うがい等の感染予防が重要であると再認識できた。コロナ禍前に流行していた感染症の再燃やHIVについて、気をつけるべきポイントが再度確認でき良かったです。標準予防策の大切さも再確認しました。コロナ感染症でHIVについて何となく忘れがちになっていたが、水面下では患者の高齢化が問題となっており、生活習慣病や血液透析・精神疾患など合併症の問題が出てきている。本日の講演を聴き、改めてHIVの現状について理解できた。コロナ対策からHIVの最新知見まで、参考になりました。しっかりと感染症対策をして業務に取り組もうと思いました。わかりやすかったです。改めて感染症の怖さを知り日頃から自分が行える感染対策について再認識しました。感染症における一番の対策は標準予防策だということを学んだ。感染症予防のために肩より上に手を持って行って極力触る事が無いように気を付けたい。感染対策として今後も手指消毒・手洗い・マスクの着用は継続したいと思います。HIV/AIDSについて、わかりやすく説明されていて理解しやすかった。通常の日常生活では感染しないし、標準予防策で対応は十分であることがわかり、恐れる病気ではないことが理解できました。感染対策のうちの一つにある手指衛生が自分自身十分には行えていないと思うので見直して行きたい。基本の手洗い、マスクの重要性をより思った。今後も予防が必要だと感じた。施設や病院でもまだまだ、コロナのクラスター発生している現状。マスクや手洗いうがいなど基本的なスタンダード プリコーションが重要であると思った。又、患者さんへの指導も行なっていきたい。HIVが九州地区に多いのも以外で梅毒やB型肝炎の際は注意して検査の必要性を医師と相談していきたい。少し難しい部分もあった。新型コロナの感染力が発症前や発症時にピークになることや、鳥由来新型インフルエンザの死亡率が新型コロナの何倍にもなると予想されていることを知り勉強になりました。他人事のように思っていたが、HIVなどの感染症は、我々のすぐ近くにあるということを知ることができた。丁寧に説明されてよく理解できました。冬場の感染症については自身も留意すべき点があって有意義だった。HIVの講演については、知識を増やす点において有意義だった。特にHIVの講義はとても勉強になりました。こういった際に検査を検討すべきかについて知ることができて良かったです。内容は難しかったのですが、勉強になりました。梅毒やHIV感染症に関する最新の情報や取り組みを学びました。標準予防策をしっかり行い勤務していきたいと思います。普段触れる機会が無い抗HIV薬について、現在の方向性について知ることができてよかったです。聞いてみてよかったです。無意識に腕を頭の高さまで上げてしまう事があるので、感染予防として腕の高さを意識して業務にあたろうと思いました。

●令和5年度後期セミナー

熊本大学病院 令和5年度 感染症セミナー

開催概要：

令和6年2月4日に「熊本大学病院 令和5年度 後期感染症セミナー」を、熊本医師会館での現地開催およびWebでのハイブリッドセミナー形式にて開催しました。テーマを「ポストコロナのAMR対策～熊本のAMR対策を考える～」と題し、大曲 貴夫先生(国立国際医療研究センター病院)から「日本の新しい薬剤耐性(AMR)対策」、尾田 一貴先生(熊本大学病院)から「抗菌薬適正使用に関わる多面的取り組み」についてご講演いただきました。

薬剤耐性菌への対応について最新知見についての解説が行われました。参加人数は135名で、医師、薬剤師、看護師、獣医師、介護職、臨床検査技師など多職種の聴講があった。参加者アンケート結果も概ね好評でした。

熊本大学病院 令和5年度後期感染症セミナー
ポストコロナのAMR対策
～熊本のAMR対策を考える～

日時 2024年2月4日(日) 13:30～15:30
場所 熊本市医師会館 2階研修室② (熊本市中央区本荘3-3-3)
本セミナーは会場参加とWEB配信を選択いただけるハイブリッド開催となります

対象者 感染症対策に関心のある医師、歯科医師、看護師、薬剤師、事務職員、学生等
※ 医療職の方に限らず、どなたでもご参加ください

参加無料
(事前申し込み)
<定員>
会場参加100名
WEB参加200名

プログラム

座長: 坂上 拓郎
熊本大学大学院 生命科学研究部 呼吸器内科学講座
熊本大学病院 新興感染症対策専門講座 教授

講演 1
『抗菌薬適正使用に関わる多面的取り組み～サーベイランスから個別化投与まで～』
(13:30～14:10) **講師:** 尾田 一貴
熊本大学病院薬剤部 感染制御部 感染制御専門薬剤師、
抗菌薬化学療法認定薬剤師
※ 5分休憩

座長: 安永 純一郎
熊本大学大学院 生命科学研究部 血液・膠原病・感染症内科学講座 准教授

講演 2
『日本の新しい薬剤耐性(AMR)対策アクションプランのめざすところ』
(14:15～15:05) **講師:** 大曲 貴夫
国立国際医療研究センター病院
国際感染症センター長・AMR・臨床リファレンスセンター長
※ 5分休憩

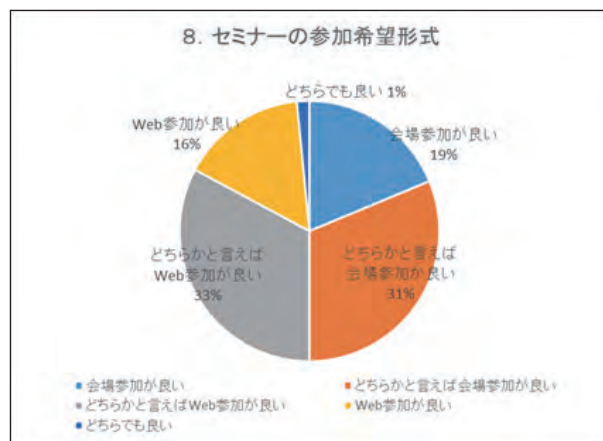
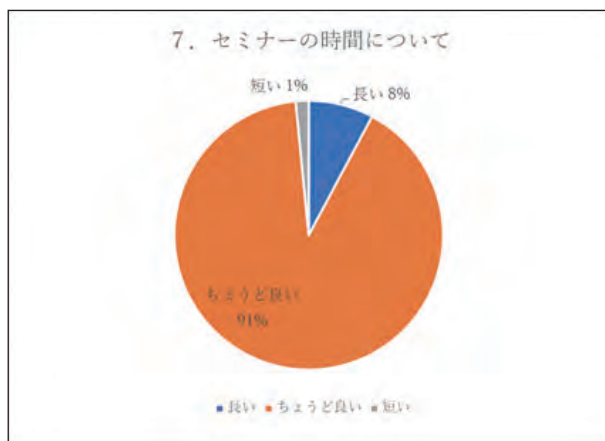
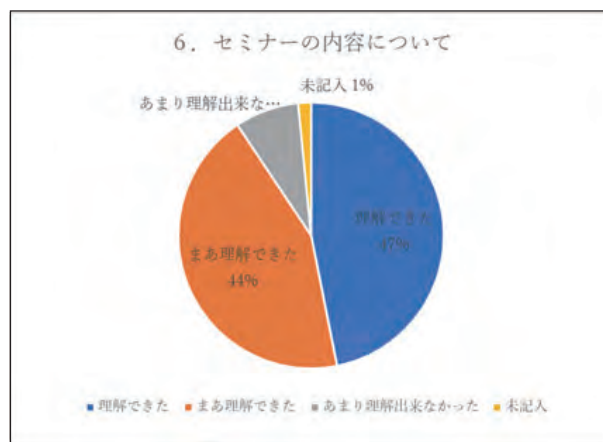
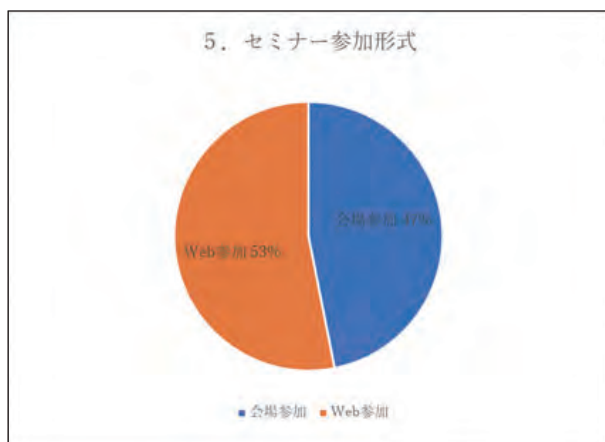
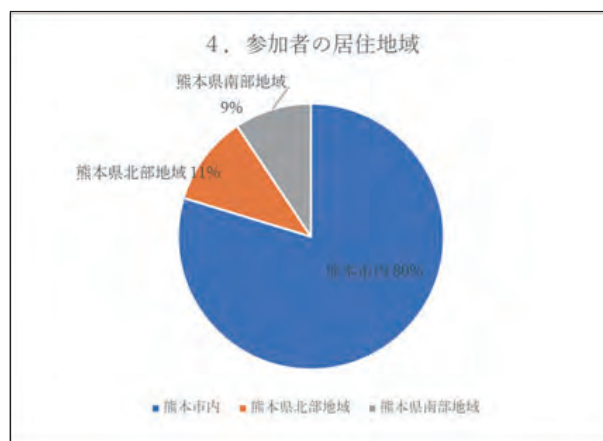
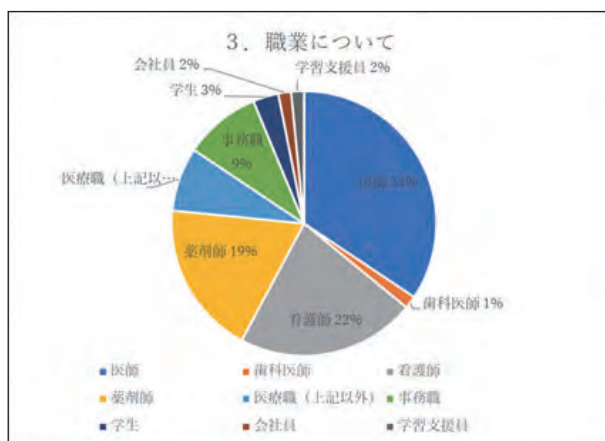
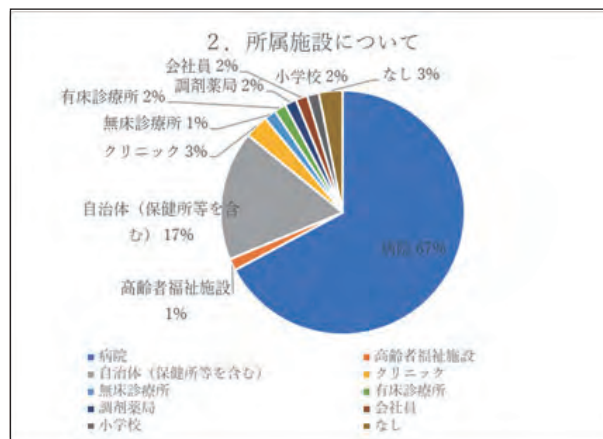
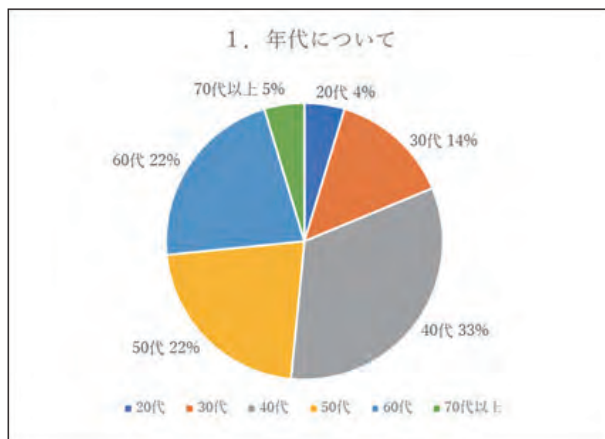
質疑応答 参加された皆様からの質問に講師がお答えいたします。
(15:10～15:30)

©2010 熊本県くまモン



<参加者アンケート>

・日本の感染症領域のトップランナーである先生の講演を熊本で拝聴できてよかったです。・興味ある内容で大変良かった・興味深い内容で面白かったです。勉強になりました。・わかりやすいご講演ありがとうございました。・機会があればまた参加させていただきます。・分かりやすく、仕事上に活かせる内容であった。・特定の抗菌薬の適正使用に対してとても分かりやすくお話して頂きありがとうございました。職場に持ち帰り抗菌薬を漫然と使用することの危険性など伝達していきたくと思いました。・第一線の講師の方からわかりやすいお話を拝聴でき参考になった。web参加でしたが、ハンドアウトがダウンロードできれば、たいへん嬉しいです。また、オンデマンドなどでも聴けるとより理解が深まるかなと思います。・来年度の診療報酬改定での介護施設との連携や AWaRe分類など、勉強になりました。AMR対策として考えなければいけないことについて考える機会になったと思います。



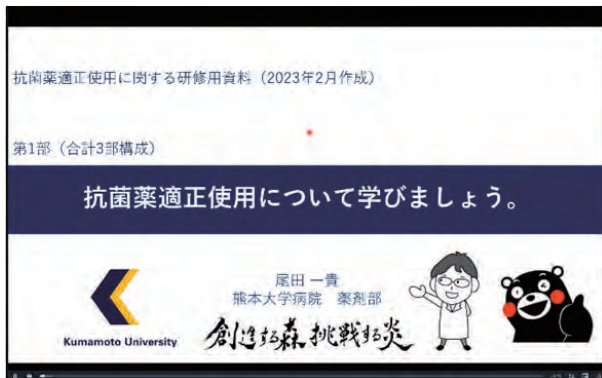
【リカレント教育へ向けた感染症研修webコースコンテンツの作成】

(先端ウイルス学コース、院内感染制御コース、災害時感染対策コース)

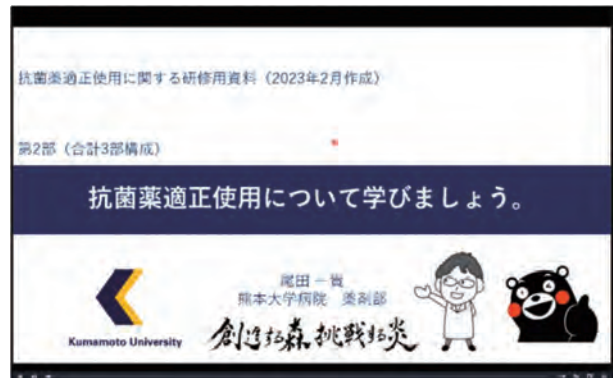
高度医療人の育成・リカレント教育へ向けた感染症教育用のwebコンテンツの作成を行いました。熊本大学のEラーニングサイトに感染症リカレント教育の講習コースを設置し、11編の動画公開を行い、13名のコース受講者(院内)を登録しました。

抗菌薬適正使用

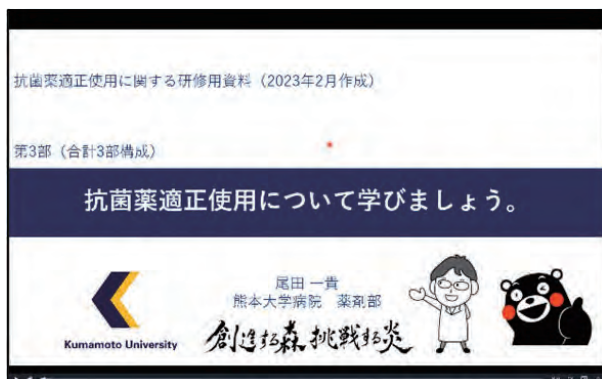
第1部(PK-PD)



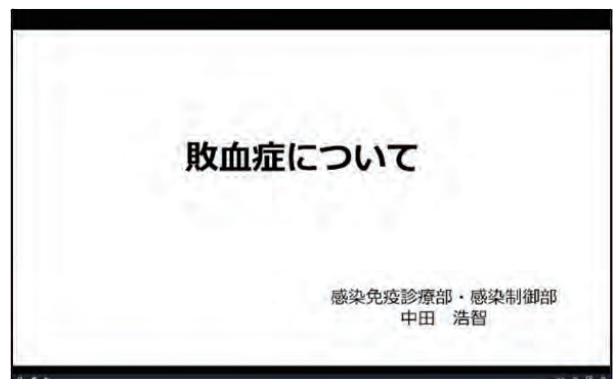
第2部(抗菌薬の役割)



第3部(抗菌薬選択)



敗血症

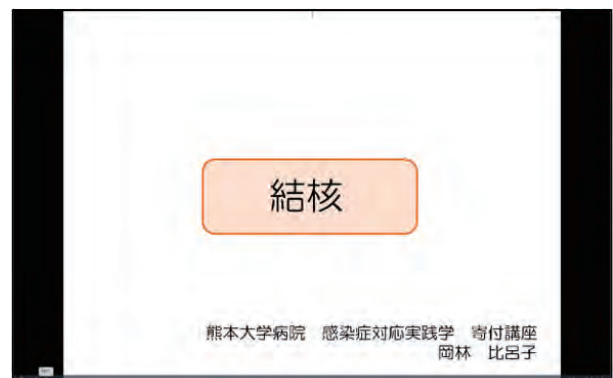


呼吸器感染症

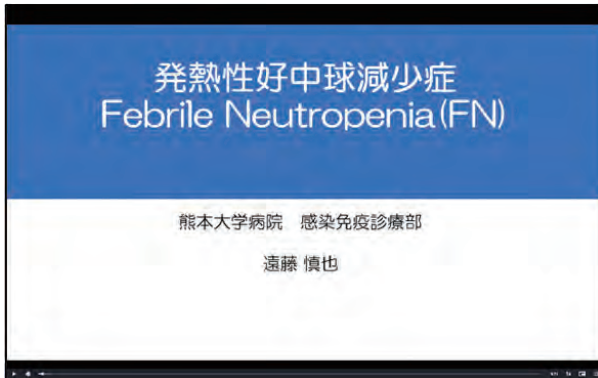
成人市中肺炎診療の基本



結核



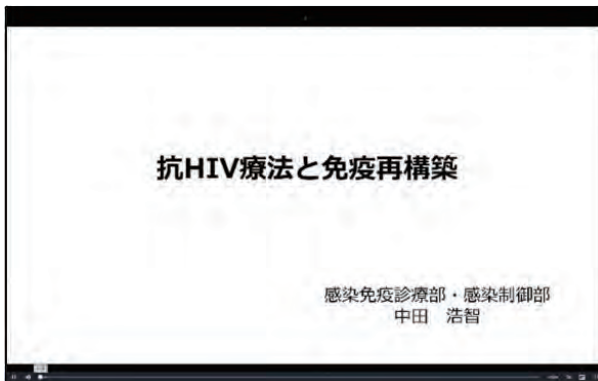
日和見感染症と発熱性好中球減少症
発熱性好中球減少症



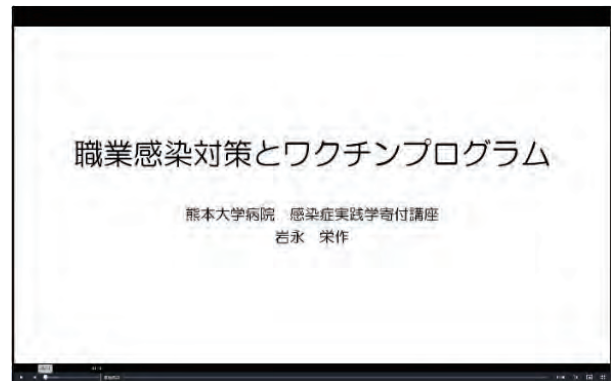
日和見感染



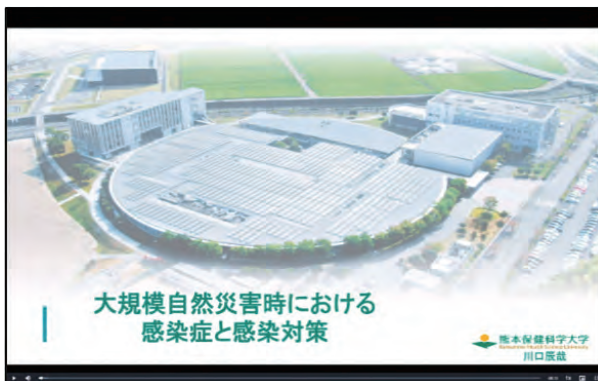
免疫不全
HIVと免疫再構築



職業感染対策
職業感染対策とワクチンプログラム



災害医療
災害と感染症



1. 熊本県地域医療支援機構（熊本大学病院 地域医療支援センター）

【論文、執筆】

- Masaharu Akao, Hikari Tsuji, Kengo Kusano, Kunihiko Matsui, Shinya Hiramitsu, Yutaka Hatori, Hironori Odakura, Hisao Ogawa. Clinical characteristics and outcomes of Japanese atrial fibrillation patients with poor medication adherence: A sub-analysis of the GENERAL study. *Journal of cardiology*. 2023. 81. 2. 209-214
- Eiichiro Yamamoto, Hiroki Usuku, Daisuke Sueta, Satoru Suzuki, Taishi Nakamura, Kunihiko Matsui, Kenichi Matsushita, Tomoko Iwasaki, Naritsugu Sakaino, Toshihiko Sakanashi, et al. Efficacy and Safety of Esaxerenone in Hypertensive Patients with Left Ventricular Hypertrophy (ESES-LVH) Study: A Multicenter, Open-Label, Prospective, Interventional Study. *Advances in Therapy*. 2024. 41. 3. 1284-1303
- Masahiro Sugawara, Sunao Kojima, Ichiro Hisatome, Kunihiko Matsui, Kazuaki Uchiyama, Naoto Yokota, Eiichi Tokutake, Yutaka Wakasa, Shinya Hiramitsu, Masako Waki, et al. Impacts of Febuxostat on Cerebral and Cardiovascular Events in Elderly Patients with Hyperuricemia: Post Hoc Analysis of a Randomized Controlled Trial. *Clinical pharmacology and therapeutics*. 2024
- 高本 文明、高柳 宏史：著書の執筆内容について監修・助言、ことばの点滴：医療Q&A(下)、熊本日日新聞社(出版)、258-275, 2023
- 医療系AIガイドライン作成チーム(大西 弘高, 佐瀬 雄治, 森田 瑞樹, 高柳 宏史, 大野 每子)、プライマリ・ケアにおけるAI利用ガイドライン - プライマリ・ケア医におけるAI利用の可能性と注意点 -

【研究】

- 松井 邦彦(分担研究者)、基盤研究(C)「臨床現場での多重課題における意思決定要因の解明」(研究代表者：小山 博史)、研究期間：2020-04-01-2025-03-31
- 松井 邦彦(分担研究者)、基盤研究(C)「粒子状物質による急性心筋梗塞や院外心停止の発症および発症メカニズムの解明」(研究代表者：小山 博史)、研究期間：2021/04/01-2024/03/31
- 松井 邦彦(研究開発分担者)、「日本医療研究開発機構 研究公正高度化モデル開発支援事業 医療分野の「責任ある研究・イノベーション(RRI)」推進に資する取り組み」、研究期間：2022/12/01-2025/03/31

【学会発表】

- Michito Sadohara, Kunihiko Matsui. What Perspectives do U.S. Hospitalists who had Clinical Training in Japan have toward Introduction of Hospitalist Services for the Work Style Reform in Japan? A Qualitative Interview Study. Society of General Internal Medicine Annual Meeting 2023. May 10-13. Aurora, Colorado. (Poster presentation)
- Michito Sadohara, Hiroshi Takayanagi, Kunihiko Matsui. The educational impact of fieldwork and lodging trip for medical students who have obligation to work at rural area. WONCA 2023. October 26-29. Sidney, Australia. (Oral presentation)
- 西村 理恵, 植田 真一郎, 松井 邦彦, 佐土原 道人, 東恩納 美樹, 作間 未織, 森本 剛、「臨床医学系学会における研究公正・倫理教育の現状と課題」、医学教育学会、2023/07/28-2023/07/29、長崎市、(口演)
- 阿部 貴美香, 高柳 宏史, 園川 仁美, 古池 雅明, 松井 邦彦, 「ここ、熊本で医師になること～地域医療広報誌Cocodeを通して～」、第14回日本プライマリ・ケア連合学会学術大会2024、2023/05/12-2023/05/14、豊田市、(ポスター)
- 平木 亨弥, 高柳 宏史, 永野 心, 松岡 りほ, 松井 邦彦, 「コロナ禍の中でつなげる～熊本大学の地域医療ゼミの取り組み～」、第14回日本プライマリ・ケア連合学会学術大会2024、2023/05/12-2023/05/14、豊田市、(ポスター)

【講演会、講師】

- 高柳 宏史、「総合診療の専門性とは～家庭医療学の分野から～」、第3回熊本地域医療勉強会、2023/06/23、(講演)
- 高柳 宏史、「総合診療医のためのメンタルヘルスケアの基礎」、第91回 KOPe 定例会、2023/10/18、(講義)
- 高柳 宏史、「災害の地域への影響～熊本地震、水俣病～」、長崎大学・福島県立医科大学共同大学院 災害・被ばく医療科学共同専攻(修士課程)医学科コース「地域医療学」、2023/12/20、(講義)
- 高柳 宏史、「共に築くプライマリ・ケアとは～2つの事例をとおして～」、令和5年度臨床検査講習会、2024/01/14、(講演)
- 高柳 宏史、「海外と比較でミエル！日本の総合診療医！」、Dr. Prime Academia レクチャー、2024/01/31、(講演)
- 高柳 宏史、「日常診療におけるポリファーマシーに対する合理的な減薬の一手」、2023年度日本プライマリ・ケア連合学会熊本県支部講演会・総会、2024/02/17、(講演)
- 高柳 宏史、「ICPC-3について」、日本プライマリ・ケア連合学会オンラインICPCセミナー、2024/03/20、(講義)

2. 地域医療・総合診療実践学寄附講座

【論文、執筆】

- Kosuke Ishizuka, Kiyoshi Shikino, Akira Kuriyama, Yoshito Nishimura, Emiri Tanaka, Saori Nonaka, Michito Sadohara, Mitsuru Moriya, Noriko Yamamoto. A proposal for coping strategies on burnout among Japanese resident physicians. Journal of General and Family Medicine. Vol. 25, p 83-84, 2024

【研究】

- 荒木 智、基盤研究(C)「トレハロースによる腸-脳-心連関の解明」、研究期間：2022/04/01-2025/03/31
- 佐土原 道人、「地域医療研修による研修医のレジリエンスの変化に関する質的研究」、研究期間：2018/08/20-2025/03/31
- 佐土原 道人、「働き方改革のためのホスピタリスト・システムの導入に対し、米国で働く日本人ホスピタリストはどのような見方をしているか?」、研究期間：2018/09/20-2025/03/31
- 佐土原 道人、「地域医療研修による研修医のレジリエンスの変化に関するアンケート調査」、研究期間：2019/06/21-2025/03/31
- 佐土原 道人、「研修医のストレスに関する実態調査」、研究期間：2018/07/20-2023/03/31
- 佐土原 道人、「研究倫理と公正に係る患者・市民参画(PPI)に関する質的研究」、研究期間：2023/12/05-2025/03/31
- 佐土原 道人、「ポストコロナの地域医療特別実習の教育的効果とコミュニティへの視点に関する研究」、研究期間：2023/11/22-2025/03/31
- 佐土原 道人、「日本医療研究開発機構 研究公正高度化モデル開発支援事業 医療分野の「責任ある研究・イノベーション(RRI)」推進に資する取り組み」、研究期間：2022/12/01-2025/03/31
- 北村 泰斗, 佐土原 道人(研究開発分担者)、「軽症・中等症として入院したCOVID-19患者における入院長期化の関連因子」、研究期間：2022/12/05-2029/03/31

【学会発表】

- Michito Sadohara, Kunihiko Matsui. What Perspectives do U.S. Hospitalists who had Clinical Training in Japan have toward Introduction of Hospitalist Services for the Work Style Reform in Japan? A Qualitative Interview Study. Society of General Internal Medicine Annual Meeting 2023. May 10-13. Aurora, Colorado. (Poster presentation)
- 佐土原 道人、「レジデント(研修医)のバーンアウトーいかに防ぎ、いかに救うかー「Wellbeing 2.0」」、ACP(米国内科学会)日本支部年次総会・講演会2023、2023/06/24、オンライン、(オンライン講演)

- Michito Sadohara, Hiroshi Takayanagi, Kunihiro Matsui. The educational impact of fieldwork and lodging trip for medical students who have obligation to work at rural area. WONCA 2023. 2023/10/26-2023/10/29. Sidney, Australia. (Oral presentation)
- 西村 理恵, 植田 真一郎, 松井 邦彦, 佐土原 道人, 東恩納 美樹, 作間 未織, 森本 剛, 「臨床医学系学会における研究公正・倫理教育の現状と課題」、医学教育学会、2023/07/28-2023/07/29、長崎市、(口演)

【講演会、講師】

- 佐土原 道人, 「社会が求める医師の臨床能力とは、臨床研修の問題点への対応」、第22回熊本大学病院群臨床研修指導医研修ワークショップ、2023/12/01-2023/12/02、(タスクフォース)
- 佐土原 道人, 「医師臨床研修制度の理念と概要、臨床推論を引き出すプレゼンテーションの指導、臨床研修現場での評価とポートフォリオ、指導医に必要な医療安全・労務管理の知識、フィードバックセッションの体験」、第29回徳洲会グループ臨床研修指導者養成講習会、2023/12/16-2023/12/17、(タスクフォース)
- 佐土原 道人, 研修評価、2023年度全日病・臨床指導医講習会、2024/01/14, 2024/01/28、(タスクフォース)
- 佐土原 道人, フィードバック, 研修方略、令和5年度臨床研修指導医講習会(全国自治体病院協議会)、2024/02/03-2024/02/04、(タスクフォース)
- 佐土原 道人, 研修方法と研修評価、令和5年度第1回看護師特定行為指導者講習会(全日病)、2023/09/10、(タスクフォース)
- 佐土原 道人, 研修方法と研修評価、令和5年度第3回看護師特定行為指導者講習会(全日病)、2023/11/19、(タスクフォース)

3. 教育拠点（くまもと県北拠点・河浦拠点）

【論文、執筆】

- Shimanaga S, Oyama K, Takaki Y, Miyagi T. Usefulness of Fecal Calprotectin in Differentiating Inflammatory Bowel Disease in a Young Patient with Autism Spectrum Disorder. Journal of Hospital General Medicine. 2024

【学会発表】

- Kohta Oyama, Sadahiro Tamiya. Thai medical students studying community medicine in Kumamoto Prefecture, Japan. WONCA World Conference. 2023/10/26-2023/10/29. Sidney, Australia. (ポスター)
- 鶴田 真三, 「若手医師が国診協施設にたどり着く理由」、全国国保地域医療学会、2023/10/7

【講演会、講師】

- Kohta Oyama. Healthcare for the Elderly in Japan. School of Medicine Annual Scientific Conference 2023. 2023/12/13-2023/12/15. (口演)

4. 総合診療科 医局員・専攻医

【論文、執筆】

- 平賀 円, 「病院総合医チームPresents実践！使える論文MyTop5-超高齢者医療編-」、プライマリ・ケア(一般社団法人日本プライマリ・ケア連合学会発行)、page72-74 Vol.8 No.4 2023

【学会発表】

- 松田 圭史, 「Potential use of new generation of immunomodulatory imide drugs (IMiDs) against IMiDs resistant multiple myeloma.」、第82回日本癌学会学術総会、2023/09/21-2023/09/23、(ポスター)

- 平賀 円、「施設看護スタッフとの連絡ツールにグループチャットを導入した事による変化について」、第27回日本病院総合診療医学会学術総会、2023/08/26-2023/08/27、東京、(口演)
- 平賀 円、「山間部の地域中核病院で経験したツツガムシ病の5例のまとめ」、日本プライマリ・ケア連合学会 第18回九州支部総会・学術大会、2024/01/20-2024/01/21、宮崎、(口演)
- 下地 徹、「在宅看取りにおける緊急時対応を向上させるための取り組み～当院での看取り本と在宅患者確認表の導入～」、日本プライマリケア連合学会九州支部総会・学術大会

【講演会、講師】

- 平賀 円、「私の考える総合診療～専門医第一期生の目線から～」、熊本県医師会令和5年度日本医師会生涯教育講座、2024/02/24、(口演)



1. 教員

■ 荒木 智 特任准教授（地域医療・総合診療実践学寄附講座）

地域医療・総合診療実践学寄附講座に赴任し1年半が経過しました。やっと仕事にも慣れることができ、今年度は就学資金貸与学生や医師の面談などのキャリア形成支援業務や地域医療機関への診療支援に携わらせていただきました。

今年一番、思い出に残ったのは3年ぶりに実施された上天草地域での夏季地域医療特別実習に参加させていただいたことです。現在、天草地域で診療支援をさせていただいておりますが、実習の指導を通して、改めて病院を出て地域を学ぶことの重要性を学ばせていただきました。医師となり20年の節目の年となりましたが、今後も総合診療医としての学びを深めてまいりたいと思います。今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

■ 佐土原 道人 特任助教（地域医療・総合診療実践学寄附講座）

診療支援先は、昨年度は、小国公立病院と阿蘇医療センターでお世話になりました。様々な病院から実習、研修に来ている学生や研修医からよい刺激を受けております。

総合診療専門研修プログラム関連では、来年度も途切れなくプログラムに1名の専攻医を得たこと、専攻医の修了見込みが1名、専門研修修了者が専門医試験に1名合格、特任指導医からの移行で複数の専門医の取得者ができました。ゆっくりですが、着実に総合診療専門研修もひろがりを見せて安定した運営ができてきております。引き続き専攻医の専門研修を各連携施設でお願いすることになりますので、ご指導をよろしくお願いいたします。

コロナ禍から、ウィズ／ポストコロナ時代へと移っていった昨年度ですが、地域枠学生や自治医科大学学生を対象に行っている地域医療特別実習が、4年越しに開催できました。学生のカリキュラムの都合で、夏季と冬季の2回に分けて行いました。その成果は、昨年度シドニーで開催された世界家庭医機構で発表し、今年度もボストンの米国総合内科学会で発表予定です。我々の教育活動を世界に発信できることは、うれしい限りです。今後ともよろしくお願いいたします。

■ 高柳 宏史 特任助教（地域医療支援センター）

2022年から家庭医療学の講義を2コマ、総合診療学の中で設けることになり、今年は2年目でした。家庭医療学を2コマで概説するというのは、難しいことであると感じつつも、海外におけるFamily medicineの教科書、論文などを準備のために読み吸収・咀嚼してまとめるというのは、自分自身にとってもとても深い学びになっています。

以前から、家庭医療学について講義で触れているのですが、「プライマリヘルスケア」や「プライマリケア」という言葉は家庭医の地域での取り組みを整理しまとめたものであるというのが、最初の大きな学びでした。

第一講では、家庭医療学が一つの専門領域として確立された歴史的な経緯、その中でプライマリヘルスケアやプライマリケアがどのように生まれたかについて話をしています。

第二講では、家庭医療学の専門性の確立の中で触れることになる患者中心性について概説しています。さらに、継続的な医師・患者の関係性、そして、包括性について概説しています。

近年、統合という言葉が総合診療分野で多用されていますが、海外においてこの統合という言葉はintegrated careやintegrative medicineといった言葉があります。しかし、それぞれ方向性の異なるものです。このことに恥ずかしながらこの2コマの家庭医療学の講義を開講してから気が付きました。今では、そのどちらも家庭医としての診療にはつながってくる内容であるため、場面場面でちゃんと使い分けできるようになりました。興味のある方は、それぞれの意味する内容を調べてみてください。

一年間、ありがとうございました。

■ 北村 泰斗 特任助教（地域医療・総合診療実践学寄附講座）

今年度は、地域医療・総合診療に関連した臨床研究、地域枠学生・医師のキャリア支援、医学部カリキュラム、テレビ会議システムを利用した合同WEBカンファ、総診セミナー、診療支援（学内総合診療科外来、そよう病院外来、くまもと県北病院救急外来）等の活動に関わらせていただきました。

なかでも、初参加となった夏季地域医療特別実習は、本講座のエッセンスが詰まっていて、学生とともに自身の学びになりました。今後の活動に繋げていきたいと思っています。

診療支援の場では、高齢化が進み、限られた資源の中で、それぞれの生活に応じた医療や福祉との適切な関係をうまくコーディネートすることへのニーズを感じますし、総合診療医としてのやりがいを感じる部分でもありました。これから地域医療に携わっていただける学生や医師の方にも、専門性ととともに総合診療マインドを持つことの面白みを実際に体感してもらいながら、将来、地域医療の場で自然とそれらを実践してもらえるよう工夫したいと思います。今後ともご支援ご鞭撻の程、何卒よろしくお願い申し上げます。

■ 鶴田 真三 特任助教（河浦教育拠点）

河浦病院に赴任して3年目になりました。河浦拠点が動き出して以降、はじめてレジデントの入れ替わりがありました。それぞれのレジデントに合わせて教育を行うことができました。それぞれのレジデントも無理なく楽しんで河浦での生活を過ごせていたようなので、その点ではよかったと思います。

さて、河浦病院での総合診療科の活動としては、昨年と比べ、社会的にコロナ禍が薄れてきたこともあり、地域活動ができるようになってきたことで、活動の幅を広げられていると思います。地域住民向けの講話、地域の医療・介護・福祉の多職種との協議の場や勉強会、地域の祭への参加、ボランティア活動、地域の方との釣り等、以前よりレジデントや学生にも経験してもらえるようになりました。地域活動ができるようになってきたからこそ、その楽しさ、やりがい、大変さを改めて実感し、僻地だからこそ地域で生きていくことの楽しさを自分自身も改めて感じています。天草や、天草に似たような僻地での仕事の楽しさ、僻地での暮らしの楽しさを学生や若手医師、若手多職種にさらに伝えていきたいと考えています。そのためにも、今後も学生やレジデントの天草地域（特に河浦）への派遣や宣伝をどうぞよろしくお願いいたします。

今後も自分たちが地域へ浸透していき、より一層、地域の街づくりの一員となれるよう、頑張っていこうと思います。

■ 中村 孝典 特任助教（くまもと県北教育拠点）

令和5年度は、熊本大学病院地域医療・総合診療実践学寄附講座の特任助教として前年に引き続きくまもと県北病院教育拠点にて臨床業務および卒前卒後教育を行いました。

前年度同様自身の臨床業務だけでなく、学生、初期研修医、後期研修医の教育業務についても今まで以上に時間を割くことで毎度のことながら新たな発見がありました。後期研修医に対する教育では新たに2名の後期研修医が入職しました。それぞれタイプの違う学習者であり指導医としての自分の引き出しの少なさを痛感する日々でした。ただ自分のプライベートの時間を使って、医学教育の勉強会にも参加するようになりそこで得た知識を、ダイレクトに自分の教育現場で生かすこともできました。

そんな中で、日々の診療や定期的な後期研修医との振り返りを通じて、彼らの成長を実感でき教育者としてのやりがいを実感することもでき、指導医としては大変有意義な一年となりました。

研究活動については、ほぼ進捗はなく臨床、教育のみに時間を割いていました。今年度については更に後期研修医が増えるためタイムマネジメントを意識して、臨床のレベルを落とさないという大前提のうえで、学生、初期研修医、後期研修医のモチベーションを上げ続ける指導を続けながら、研究活動も行っていきたいと考えています。

2. 非常勤講師・客員研究員

■ 田宮 貞宏 東北教育拠点指導医（くまもと県北病院 院長／総合診療科）

令和6年度の「医師の働き方改革」「診療報酬改定」を見据えながら、新型コロナウイルス感染症対策でいびつになった診療体制を平時に戻していく1年だったと思います。その中で重要な課題が人員の確保です。

特に看護師の確保には多くの医療機関で様々な取り組みがなされています。先日、看護学生に向けて国家試験の対策のコンテンツを病院のInstagramに定期的に発信していきたいので協力を、との要請がありました。最近の学生は国家試験の勉強にSNSのコンテンツを利用していることが多いとのことでした。結構、驚きつつも、クリアカットな内容を短時間で確認できるのは実際便利だろうなと思いますし、それで病院の知名度が上がるのなら良い試みだと思いました。一方で医師に関しても同様と思いますが、学生時代の最終的な評価がキーワードの確認と選択肢のチョイスを極めて国家試験に合格することとなると、入職後の実臨床との関わりの中でのサポートの必要性を再認識した次第です。実臨床では選択肢を選ぶ前に、不適切問題にならないように様々な情報「キーワード」を求め続け、問題文を作りなおす作業が醍醐味ですよ。

人集め、教育…引き続き、頑張ってますよ。

■ 小山 耕太 非常勤講師／東北教育拠点指導医

（くまもと県北病院 総合診療科／熊本県健康福祉部健康局医療政策課 熊本県へき地医療支援機構）
「ワクワクが止まらない」

熊本大学に帰還して11年目、教育拠点に赴任して10年目に突入しました。コロナ感染症が社会的に5類感染症となり、院内では依然として2類感染症当時と変わらぬ対応を求められる混沌としたこの頃です。

この10年でくまもと県北教育拠点(当拠点)としての熊本県北地域及びくまもと県北病院への様々な効果(地域完結型医療の達成、救急医療体制の充実化、小児診療24時間体制の構築、卒後臨床研修医の増加、診療科の新規設置・常勤化、医師の増加等)について、熊本県の一部の地域効果として示されました。当拠点設置当初から、教育的取り組みについて、現行のくまもと県北病院研修医、専攻医、熊本県医学資金貸与(地域枠)医師から広げる構想はありましたが、設置当初のメンバーは、当時の責任者で現病院長の田宮先生と私の2名でしたので、実質的に困難な時期でもありました。それから10年が経ち、当時の研修医が指導医の立場まで成長した現在、教育の持つ真の力を創設メンバーとして実感しつつあります。

このタイミングにして私個人としては、これまでの教育拠点での取り組みを基に、当初の教育対象を熊本県北地域から熊本県全土に展開する機会を得ました。2023年4月から熊本県庁医療政策課に現在の教育拠点責任者・総合診療科部長を兼務の形で就任したのです。「まさか自分が行政の職を得るとは・・・」と感じたのは、私だけではありません。私以外に医師がいない環境に身を投じることは、まさに新たな視野を広げる良い機会になりました。詳細については割愛しますが、自治医科大学学生・卒業医師を対象に教育的取り組みを展開することが決定し、2024年1月から自治医大卒業医師が義務年限で赴任する現場に赴き、これまで当拠点で実践した教育・診療支援を開始しております。この取り組みが、熊本県自治医大卒業医師が抱える課題に「どの様に」貢献し、実りある地域医療実践を可能とするのか、実践する私自身が楽しみでワクワクが止まらない毎日です。

最後に、教育の持つ真の力について、拠点設置当初にご指導頂いた諸先輩方が仰った通り、「効果を実感するまでに10年掛かる」は、真実でした。イキッて「5年で効果を出して見せます」とか言った私をお許してください。現在の新たな教育的取り組みの効果を実感できる10年後を楽しみに、今日も新しいステップを踏み、組織としての飛躍のため、常に前向きに活動したいと思います。

引き続き、皆様のご指導とご鞭撻のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。

ゆっくりだけど、確実に前進

■ 古賀 義規 客員研究員（御所浦診療所 所長）

御所浦診療所は熊本県内で離島医療を経験できる数少ない診療所の1つで、総合診療科医師2名による常勤体制となっています。私が長期間勤務している一方で、もう1名は自治医大卒医師あるいは地域枠医師の派遣をうけて1-2年ごとに交代する体制となっています。

R5年度もクリクラ等の医学生実習、熊本県県北病院や秋田県などからの地域医療研修を受け入れることができました。前年度まで2年続けてCOVID-19流行に伴い中止となっていた天草圏域での医学生夏季実習は、R5年度は何とか実施されることになり御所浦も医学生を受け入れることができました。

R6年度は県内のへき地医療の連携や継続性強化のための活動に注力し、教育面では多くの医学生や研修医に離島・へき地での地域医療に理解を深めてもらい、地域医療・家庭医療にやりがいをもって取り組める人材育成の一助となりたいと思います。

■ 片岡 恵一郎 客員研究員（小国公立病院 病院事業管理者）

2018年度より、松井教授のご厚意により客員研究員として、小国公立病院に勤務しながら、地域医療支援センターに所属させていただいており、2023年度が6年目となりました。

2023年3月の地域医療構想調整会議で、小国公立病院の阿蘇医療圏域内での役割を「地域密着型多機能病院」と定義し、積極的に運営を継続していく事になりました。地域密着型事業の一貫として、2023年度は「小国郷医療MaaS・DX推進事業」が国のデジタル田園都市国家構想の事業に採択され、1年間かけて、約8400万円の事業を実行致しました。この事業を実行するにあたり熊本大学からもご支援・ご協力を頂きながらの事業遂行となりました。

2023年7月には、閉院する民間のクリニックの診療を引き継ぐ形で「おぐにサテライト診療所」を開所し、医療MaaS・DX推進事業の拠点としての運営を開始しました。この診療所では、これまで通院されていた患者さんの対面診療を継続しながら、訪問診療とオンライン診療をハイブリッドで提供できる様、システムを構築致しました。そして、2024年2月より、いよいよオンライン診療車「柴三郎号」が小国郷を走り始めました。医療スタッフの不足、診療する場所の不足、高齢者の移動手手段の不足を一気に解決する可能性のあるこの「柴三郎号」のポテンシャルを十分に引き出せる様、知恵を絞っていきたくと考えております。少子高齢化の進んだ医療資源の少ない地方での課題解決の為の強力なツールとして地域医療の実習・研修にも良い素材を提供できるものと考えております。

新しい事業の立ち上げの年で地域医療支援センターへの出入りが少なくなってしまう、大変心苦しく思っておりますが、熊本大学からの地域医療支援は、地方にとって本当に貴重なもので、今年度も多大なるマンパワーを小国の医療現場に送っていただきました。

2024年度も、引き続いての厚いご支援に対してご恩返しができる様、客員研究員としてできる事を微力ながら務めさせていただきたいと考えております。今後ともよろしくお願いいたします。

■ 松本 朋樹 客員研究員（松本内科・眼科 院長）

天草から、医療法人孔和会 松本内科眼科の松本朋樹です。天草地域医療センターでの勤務の後、客員研究員の肩書を拝命し、両親のクリニックを継承しつつ、リクルートを中心に大学でのプロジェクトに関わらせていただいております。

今年度は承継の方で慌ただしく、あっという間に一年が過ぎ去ってしまいました。天草から熊本・九州の総合診療を盛り上げることができるよう、精進していきます。

医師の偏在は大きな課題の一つとなっていますが、総合診療はそれを解決する鍵となる診療科であると確信しており、卒前・卒後教育を通した総合診療の啓蒙は大きな意味を持っていると考えます。

本年度も大変お世話になりました。

3. 総合診療科 医局員・専攻医

■ 武末 真紀子 医師（大学院生）

今年度は出産・育児と大学院での研究の両立で慌ただしい一年でした。産後は年齢と思わぬ乳腺トラブルのため想像をはるかに超えた体調の悪さで、なかなか研究を進められない焦りなど仕事面ではつらい時期もありました。研究に関しては、本格的にシステマティックレビューを開始することができましたが、やってみると思ったより手間取る部分もありますが、思ったよりスムーズな部分もあり、遅れはとりつつ少しずつ前進していると思っています。次年度の前半のうちに結果まで出せるように進めていく予定です。次年度は仕事復帰も視野に頑張っていこうと思います。

■ 松田 圭史 医師（御所浦診療所）

今年度は御所浦診療所での勤務となりました。御所浦は離島ですので船を利用しなければ辿り着くことができません。そのような環境での勤務は初めてでしたので、とても新鮮で充実した1年となりました。診療においては、救急搬送や紹介などの際には離島ならではの難しさを感じることがありましたが、患者さんとの距離も近く、訪問診療や学校健診など地域医療・総合診療の醍醐味を存分に味わうことができました。生活においても、診療所からはオーシャンビューですし、魚釣りや島のイベント（夏祭り、恐竜博物館オープン、など）を楽しむことができました。

また、今年度で熊本県医師修学資金貸与制度による義務年限も無事満了となりました。義務として地域で勤務するわけですが、どの地域でも温かく迎え入れて下さり、多くのことを勉強・経験させて頂きました。今後もこの経験を活かして熊本県の地域医療・総合診療に貢献できればと考えております。今後ともよろしくお願いいたします。

■ 空田 健一 医師（湯島へき地診療所）

湯島には施設がありません。島の住民は、この2年間で240人から190人に減少しました。島での生活が困難となり、島を出て行く高齢者の方々の寂しそうな姿を見てきました。見送る方々の寂しそうな姿も見てきました。出て行かれた島の人々は誰もが、できるだけ長い間、島で生活することを望んでいました。島の人同士のつながりは強く、仲間とのきずなの中で暮らすことが島の人々にとって幸せなのでしょう。

島には豊かな自然がありますが、働き口は少ないため、今後も急速に人口が減少していくと思われます。そのような中、上天草市立湯島へき地診療所では、1日に10人程度をゆっくり診察しています。一生懸命に働いても、いろんな陰口を言われることもあります。島出身の看護師さんのおかげで、負担がものすごく軽減しています。

これまで患者さんとの共通の理解基盤を探りながら診てきて、最近は処方内容も変化がなくなりました。救急は島で粘るより、早急に済生会みすみ病院に送ることを望まれるため、閾値を低くして紹介しております。

島の患者さんは基本的に元気で、右肩下がりに老衰が進行しています。コロナで進行が速まったかもしれませんが。今の診療所のメインの仕事は、住民が島での生活はもう限界と感じて、島から出て行かれるまでを見守ることです。湯島の医療は、限られた医療資源であらゆる状況に対処する経験を積める貴重な場ではなく、総合診療専門医としての成長が乏しいように感じてきました。私は、熊本大学の地域枠の方々にとって湯島は、働くメリットよりデメリットの方が大きいと思うので、おすすめしません。

今後は、「看護師が島にいてくれるから安心」と言われるような看護師を育て、Joinやオンライン診療を活用すればよいと思います。

湯島の関係者が一体となって、実情を踏まえた将来の医療提供体制について協議していただけますと幸いです。

■ 平賀 円 医師 (阿蘇医療センター 内科)

令和4年～5年度は阿蘇医療センターで2年間の勤務を行いました。甲斐病院長や湯本副院長をはじめ様々な方々のサポートのおかげで充実した2年間になりました。コロナ禍真っ只中の阿蘇は、ドライブスルー発熱外来やコロナ感染病棟など慣れないものばかりで、病院や施設でもクラスターが生じることもあり、施設スタッフと連携しながら対応したことも良い思い出です。

熊大総診の後輩である松岡先生も令和5年度から阿蘇勤務となり、あらたな挑戦として、チーム回診、学生/研修医教育に力を入れました。私が去った後も、そのようなチーム体制という文化が根付いてくれれば幸いです。

8月には日本病院総合診療医学会で、1月には日本プライマリケア学会九州地方会でそれぞれ発表を行いました。現地で参加して様々な先生方と直接お話しすることで、私自身もとても刺激になりました。今後のやる気につながることでしょう。

また、2月には医師会生涯教育講座で講師としてお話する機会をいただき、私の総合診療医としての2年間を話しました。開業医の先生らとも情報共有することの重要性をあらためて認識できました。

また、「力を入れた事」といえば、熊大総診のSNSを立ち上げ、日々なんらかの情報をアップしていたことです。日々というほど頻繁ではないですが、他病院や研修医・学生ともすこしは繋がりを持てるようになったかと考えております。熊大総診を盛り上げるため、若い方々に興味を持って貰えるように、今後も継続していきたいと思えます。

地域勤務が一旦おわり、令和6年4月からは、熊本赤十字病院で後期研修を行います。高次医療機関での勤務は初めてで緊張しておりますが、総診とのダブルボードを目指す内科専攻医として、初心にもどり、基礎能力を高めていきたいと思えます。

体調を壊さず、仕事もきちんとこなし、こどもの成長を見守り、大学院もガンバリマス。

■ 久保崎 順子 医師 (熊本医療センター 総合診療科)

現在、国立病院機構熊本医療センター 総合診療科に勤務しています。この1年も業務は特に変わらず、外来(新患・再来)、救急外来(当直含む)、入院患者診療を担当しました。日々の診療では、未だに嬉しいこと、反省することが同じくらいありますが、毎日、丁寧に患者さんを診ることが出来る今の環境(総合診療科の先生方と、看護師さんや秘書さんたち皆さん)に感謝しています。

診療以外のこととすと、去年から開始していた院内急変についてデータ収集が形になり、まずは院内の勉強会で発表できました。(私は患者さんのご家族に急変リスクについてお話をする際、このデータを引き合いに出すこともあり、結果的に実用性がありました。) また、歯科からコンサルトとなった下顎骨髄炎の症例を院内学会で発表しました。

また、病院総合診療医学会で若手の先輩方が作っている「良質な診断のワーキンググループ」の仲間に入れていただき、学会発表や学会誌への論文投稿を行いました。そのグループでは、診断エラー、医療におけるAI、総合診療科⇄他科のコンサルトについてなど、興味深いテーマを扱っています。その関連で医学書院の「総合診療」に執筆もさせていただく機会がありました。

いずれも、上司の先生方の手助けがあったからこそ出来たことです(マイペースなので迷惑をかけていることもしばしばではないかと思えます)。日々感謝でいっぱいです。

今年は、熊本大学の先生方との交流を増やしたいと思っています。今年も何卒宜しく願いいたします。

■ 永田 洋介 医師 (球磨郡公立多良木病院)

総合診療専門医として必要とされることを考えながら活動する1年でした。

総合診療科外来に加え、救急外来での救急対応、一般病棟管理や集中治療管理、診療所勤務、地域公演と様々な経験をしました。

様々な場面においても、健康を管理することはまさに総合診療そのもので、多面的に考えることの重要性を学びました。

今後も引き続き成長出来るように研鑽を積みしたいと思います。

■ 早川 香菜美 医師（地域医療センター）

令和5年度は1年間の後期研修の期間をいただき、熊本大学病院緩和ケアセンター並びに熊本地域医療センター緩和ケア科で半年ずつ緩和ケアの研修をさせていただきました。熊本大学病院では、緩和ケアチームの一員として様々な診療科で診断、治療されている患者様の症状緩和を中心に、コンサルテーション活動を行わせていただきました。チーム内での多職種との連携はもちろんのこと、他科との連携についても大変なことも多くありましたがとても勉強になりました。熊本地域医療センターでは緩和ケア病棟で主治医として終末期医療に携わらせていただきました。主治医として人生の最終段階にある患者様・ご家族との関わりは、個別性も高く日々頭を悩ませるものでしたが、以前と比較して苦手意識は薄くなったかなと思っています。

緩和ケアの分野は奥が深く1年という短い時間ではまだまだ学び足りないなと思っているので、また機会があればより深く学びたいです。

この1年で学んだことを来年度からの地域医療に活かしていきたいと思います。

■ 下地 徹 専攻医

2023年4～6月に熊本大学附属病院にて救急科研修、7月からは天草市立河浦病院にて総合診療研修をし、計5年間というやや長い時間をかけて総合診療専門研修プログラムの履修期間を終えることができました。また、その間短い期間でしたが小国公立病院での外来・救急診療をすることもでき、地域で少しずつ経験を積んでいると感じました。この一年間で一番印象に残っているのは河浦病院でのことです。慢性疾患のマネジメントを勉強できたこともよかったです。地域のヘルスプロモーションのための地域講話、学生の地域勉強会の引率、病院職員と心肺蘇生講習会などを行い、それらの活動を通して地域志向性や成人教育についても学ぶことができました。思い返すと、前年度までとはかなり違うことに触れてきたなと感じます。学ぶほどに総合診療医としてはまだまだ未熟だなと感じることが多いのですが、楽しく学べていると感じています。今後ですが、これから専門医試験の準備をすすめながら、今まであまり考えてこなかった今後の自分のキャリアについても考えていこうと思います。

■ 本田 宏介 専攻医

令和5年度は3つの病院に勤務しました。4月～6月は天草市立河浦病院勤務でした。比較的小さな病院ですが、MIRI以外はだいたい揃っていました。訪問診療に力をいれていますが、訪問先では医療機器がほとんど使えないため、問診の力や身体診察の力を養えたと思います。診療科間の壁がなくコンサルトしやすい良い雰囲気のホテルでした。新鮮な海の幸、山の幸など、近所のお店の料理が美味しかったです。

7月～12月はくまもと県北病院で、2つの診療科に勤務しました。7月～9月は小児科でした。患者さん自身が訴えを言葉にできないことも多く、ご家族から情報を訊きだす力、患者さんの表情や泣き声等から重症度のある程度判断する力が必要でした。10月～12月は総合診療科でした。小児科では単独での主治医にはならなかったため、久しぶりに7～8名の主治医になり、また病態も複雑な方が多かったため、上級医に毎日アドバイスを頂きながら奮闘していました。毎朝総診の入院患者さんや外来患者さん、重要症例のカンファがあり、オンコールや救外勤務の日もあるので、非常に勉強になる病院でした。

1月～3月は熊本大学病院の主に救急外来勤務でした。様々な診療科から医師が来ているため、総診の先生方からはもちろん、同日勤務になった他科の先生方からの学びもあり、勉強になります。

令和6年度は総診専門医受験に向けての資料を揃え、専門医試験受験に向かって精進する所存です。

■ 松岡 隼平 専攻医

いつもお世話になっております、専攻医3年目の松岡隼平です。私も専攻医3年目を迎え、総合診療科としての役割などを意識した働き方を徐々に実行に移す段階にきました。何よりもまず自分にとって大きかったのは、直近の総合診療専門医を取られた先輩である平賀先生と同じ職場となったことでした。正直2年目までは、総合診療専門医の先輩や、年度の近い先輩に積極的にお話を聞ける機会というものがある中で、そのせいもあり勝手にわからず専門医のタスクの進捗も進まないといった状況でしたが、気軽に質問ができることや、何より実際に専門医を取った方からの意見なので、参考にさせ

てもらったことが多かったです。また、今年度は仕事と家庭の両立を行うことの大変さやその成り立たせるための方法を学びました。周りの方々の協力を得ることや、チームでの仕事の分担、業務効率を上げるための院内の取り組みなども行い、ポートフォリオのテーマにもさせていただきました。3年間で一番、総合診療科としての働き方を意識した1年間だったと思います。心残りは、自分の体力的精神的余裕があまり作れず、日常業務と専門医タスク以外のことに注力できなかったことです。

来年度は、平賀先生も異動になられるので、自分がチームのリーダーシップを発揮し、専門医の取得、学会発表などにも力を注げるような1年にできればと思います。

■ 西富 友哉 専攻医

令和5年度は熊本大学病院総合診療科で勤務をしていました。大学病院の総合診療科では複数の医療機関を受診したのちに、診断がつかない、あるいは症状が改善せず現状に満足できないという患者が多く見られました。3次医療機関を含む前医で既に種々の検査をされている方や、複雑な心理社会的背景が影響していると考えられる方も多く、これ以上自分にできることがあるのだろうかと考えることもありました。その一方で、様々な医療機関を受診されて来た方でも、丁寧な病歴聴取と身体診察で診断の糸口をつかみ、最終的に治療に至った症例も数多くあり、総合診療科としての醍醐味を実感すると同時に、病歴聴取と身体診察の重要性を改めて認識しました。

地域のクリニックでの診療や健診を行う機会もありました。クリニックでは実施できる検査が少なく、血液検査も即日結果がわかるのは赤血球、白血球、血小板ぐらいという中で、丁寧に病歴聴取や身体診察を行おうにも大勢の患者を待たせているため時間が取れないなど、大学病院とはとても対照的でした。また、健診では大部分が症候のない健康な人であり、見逃しを防ぐために丁寧な診察が求められる一方で、1人にかかる時間は3分として計画が組まれていたため、クリニック以上に時間的制約がありました。これら対照的な施設で経験を積めたことで、総合診療を学ぶ者として幅が広がったように思います。来年度も一つ一つ経験を積んでいきたいと思っています。

■ 足立 瑛彦 専攻医

県北病院に来てから、この1年で私が得たものは、「プロフェッショナルの意識」であると言っても過言ではない。特に、自分が見る疾患について、ガイドラインや教科書をその都度参照しながら治療をしていく姿勢が、この1年で確立した。医師として至極当然出来ねばならないことだが、私は初期研修医から専攻医1年目まで殆どこうした姿勢を学んで来なかった。遅きに失した感があるため、県北病院で早めに「軌道修正」できた意義は大きい。同時に、患者さんの検査を行うときに、目的や被験者の負担を考えてから施行したり、どのような状態なら退院できるか、他職種と相談する習慣がついたことも付記しておく。

今後、研修している間に、臨床で使える知識の勉強をつづけること、およびCV挿入や気管挿管などの手技も身に着けるのが、今の自分の課題である。加えて、小児科で研修したり地域医療にかかわったりしながら、自分が将来すべきことを決めていきたい。

■ 田添 英典 専攻医

2023年3月に初期研修を終え、熊本大学病院総合診療科に入局させていただきました。4月からくまもと県北病院に勤務し、1年間の内科研修を行いました。風邪から敗血症、膠原病、悪性腫瘍にいたるまで、さまざまな症例を経験することができ、総合診療医に求められる知識の幅広さを実感しました。また、地域医療連携室の方々を力を借りながら退院支援に携わる中で、地域医療の面白さを改めて感じた1年でもありました。生活に困難を抱えている患者さんひとりひとりのために、多職種で力を合わせてオーダーメイドの解決策を考えることに、とてもやりがいを感じました。

今後も日々の診療を通して医学的な知識を深めるとともに、地域包括ケアや介護保険制度についても勉強していきたいと思っています。ご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願いいたします。

4. 事務スタッフ

■ 無田 英昭 地域医療支援コーディネーター

令和5年度は、熊本県地域医療支援機構が設置され本格的に事業を開始してからちょうど10年目。そして、熊本県修学資金貸与医師の一期生の中から、義務年限を満了する初めての先生を輩出する節目の年となりました。また、この数年、新型コロナウイルス感染症の影響により、事業の縮小や中止等を余儀なくされていた支援機構の事業をようやく再開できる、そのような年ともなりました。ご縁があって令和5年度からこの仕事に携わるようになった私にとっては、何もかも初めての経験であり、ドタバタしているうちにあっという間に過ぎた1年でした。この1年をどうにか乗り越えることができたのも、松井先生をはじめ地域医療支援センターの先生方や同僚スタッフの皆様のおかげであり、そして、支援機構や貸与制度の創設以来、円滑な事業運営ができるよう常に創意工夫を重ね、改善を図りながら、この10年間の歩みを着実に進めて来られた歴代の先生方やスタッフの皆様のご尽力のおかげです。心より感謝を申し上げたいと思います。新年度は、新たに7名の貸与学生が加わり、面談や実習等でお付き合いさせていただき貸与学生、貸与医師等を合わせた数はちょうど100名になります。微力ではありますが、熊本県の地域医療の進展に少しでもお役に立てるよう引き続き頑張りたいと思います。

■ 川添 光芳 地域医療支援コーディネーター

令和5年4月、定年後の再就職ということで、熊本大学病院地域医療支援センターの地域医療支援コーディネーターに採用され、何をすればいいのか解らずオロオロしながら、早くも1年が過ぎようとしています。地域医療支援センターという名称から、医師不足地域の支援や地域医療に従事する人材の育成などをお手伝いするのが自分の役割だろうと想像していましたが、実はとても人との関わりが大切な仕事ばかりでした。

8月の炎天下に上天草で実施した夏季地域医療特別実習や、打って変わって12月の年末に阿蘇・小国で実施した冬季地域医療特別実習は、修学旅行的な楽しい雰囲気の中、学生さんが、実際の地域医療の現場で一生懸命かつ積極的に実習に取り組んでいる姿を目にして、体力的に大変な思いもしましたが、やりがいも感じました。

また、地域医療支援機構の広報誌「COCODE!」の制作にも携わらせていただきました。「COCODE!」の配布を心待ちにしている方がたくさんおられ、地域医療に奮闘されている医師の魅力などを、広く県民に知らせていく大事な仕事だと実感しました。

もう一つ私が担当している、地域医療連携ネットワーク実践学寄附講座を中心にした地域医療支援体制の構築は、まだまだ浸透していない部分もありますので、今後さらに事業を充実させるのが課題だと思っています。

このように、地域医療支援コーディネーターの仕事は、思いの外大変だという印象ですが、センターや県庁医療政策課の方々を支えてもらって、とても良い環境で仕事をさせていただいているのは大変ありがたいと、今後も微力ではありますが頑張っていこうと思っています。

■ 原田 淳子 女性医師復職支援コーディネーター

今年度4月からコーディネーターとして着任しました。働く女性や子育て世代に関わる経験はあったものの、医師の先生方のキャリア形成や就労環境は知らないことばかりで、言葉の意味を調べることから始める日々でした。専任医師の先生が不在で、十分な活動ができたとは言えませんが、松井先生や関係の先生方、事務の皆さんに助けていただき、1年を過ごすことができました。

ちょうど「医師の働き方改革」が本格始動する前年でしたが、医師のワークライフバランスの確立と安全・安心の医療体制の確保の両立、その中で一人の医師が目指す医師像に到達する道のりは、なかなか険しそうだと感じました。

今年度、冊子CLOVER第5版を作成するに当たり、県内病院のご協力を得て出産・育児支援制度のアンケートを実施しましたが、女性医師や子育て医師が制度をうまく活用できるか否かは現場の対応次第の部分もあります。

実際に制度や支援を利用できる環境づくりが進み、一人でも多くの先生方が、生きがいと楽しみを持って医師の仕事ができるよう、お手伝いをしてまいりたいと思います。

■ 山口 香 事務補佐員

今年度は、新型コロナウイルスの影響が残った昨年度までとは違い、ほぼ従来の業務が戻った1年でした。4年振りに夏季・冬季地域医療特別実習も実施され、マスクを外した笑顔の学生を見て、本来の日常が戻ったことを実感することができました。

私事ですが、地域医療支援センターで約1年、その後、地域医療・総合診療実践学寄附講座で約5年程お世話になりましたが、今年度をもって、退職することになりました。あっという間の6年でした。その間様々な業務を担当させていただきましたが、それまでに経験した事務とは違い、時代の変化を感じた日々でした。Excel、Word等のPC操作だけではなく、コロナ禍で大活躍したZoomなどのオンライン、YouTubeへのアップやHP更新などなど、全く経験の無い事に日々戸惑いながらも、同じ事務補佐の皆さんの助けをお借りして、何とか乗り切ることが出来ました。松井先生をはじめ、先生方、コーディネーターの皆さん、事務補佐の皆さんなど、周りの方々に恵まれたお陰で、大過なく過ごす事が出来たと思っています。本当にありがとうございました。

3月末で退職後、家庭の事情で県外へ転居しましたが、ニュースで熊本県の話が取り上げられるたび、スーパーで熊本県産の野菜や食品を見るたび、熊本愛を実感しています。たった6年間ではありますが、熊本の地域医療問題に関わってお仕事が出来たことを、今、改めて嬉しく思っています。

これからもお世話になった皆様のご活躍をお祈り申し上げます。

■ 山並 美緒 事務補佐員

新型コロナウイルス感染症が5類に移行した5月以降から平常業務に徐々に戻り、慌ただしく過ぎた1年でした。以前は難なくこなしていた業務も、コロナ禍で自分自身がスローペースになっていたこと、その間に自分も着実に年を重ねていたことも相まって様々な場面で着いていくのが必死でした。特に、夏季実習で湯島散策をした時は、炎天下の中歩いて体力の無さを痛感しました。危うく倒れて先生方に迷惑をおかけするところでした。

もう一つ実感したことは、コロナ禍に入学した地域枠学生の皆さんにとってこの数年は、今後医師になり地域で勤務していくために不可欠な人間関係を構築するのに大きくマイナスになったということです。夏季実習が開催されなかったり地域医療ゼミもWeb開催で、縦の繋がりが薄く地域医療を知る機会も少なく、絆が薄くなったこの数年を卒業までにどうにか取り戻せるように尽力していくのが、当センター・寄附講座の当面の使命だと思います。

来年度も、熊本の地域医療を支える方々を支える立場で、微力ながら頑張りたいと思います。よろしく願いいたします。

■ 横手 友紀子 事務補佐員

ご縁があり、今年度より再び本事業に携わらせていただくこととなりました。初めましての方も、日頃よりお世話になっている方もよろしくお願いいたします。

離れていた期間、私は以前から興味があったWebデザインを学ぶ機会を得ました。プロの講師陣からの直接の指導はとても学びになり、また、様々な年代・経験の方々と肩を並べて学習に取り組んだのも刺激的で貴重な時間でした。

さて、学習の機会と言えば、新型コロナウイルス感染症の5類移行を受け、これまで制限してきた、夏季実習(冬季実習)、肥後ふるさと医学生実習を今年度は再開することができました。

私は夏季実習に同行しましたが、うだるような暑さのなかでも実習を楽しみながら、真剣に学習に取り組む、学年・大学問わず交流を深め協力しあっている様子が印象的でした。また、ふるさと実習は直接様子を伺う機会はありませんでしたが、利用学生から県の地域医療に関心をもち進路決定の参考にもなると好評いただけました。

これらだけに限らず、様々な事業の再開を受け、私たちの取り組みが、将来、地域医療を担う皆様にとって何かの糧になればと改めて感じております。

最後になりますが、関係する皆様のご協力のもと、本年も順調に事業を行うことができました。心より感謝申し上げます。

10 あとがき

令和5年度の活動報告をさせていただきましたが、今年度は地域医療支援センター設立10年目の節目の年でありました。令和5年5月にはCOVID-19感染症も5類に移行し、感染状況も落ち着いたため3年ぶりに「夏季地域医療特別実習」を実施することができました。また試験等で夏季実習に参加できなかった学生を対象に、今年度が初開催となる「冬季地域医療特別実習」も実施しております。これらの実習は将来勤務する地域に赴くことで地域の特色や問題点を知り、地域医療に取り組む意欲を醸成する貴重な機会です。本年度は多くの修学資金貸与学生ならびに県内出身の自治医科大学生に参加していただきました。参加学生は事前学習を行ったうえで参加しており、病院や診療所のみならず地域住民の生活の場を実際に見て学ぶことで知識と経験の融合が図れたことと思います。来年度以降も引き続き貴重な学びの機会である特別実習を継続してまいります。また令和6年度の地域枠入学者は7名となっており、熊本県で活躍される方々が順調に増加しております。また修学資金貸与医師の2名の先生が本年度で義務年限を終えられることとなりました。熊本県の修学資金貸与医師としては初めての義務年限終了医師であり、令和6年3月には県庁で感謝状の贈呈が行われました。今後も面談や実習等を通して修学資金貸与学生の皆様のキャリア形成をさらに充実させるべく方策を進めてまいります。

また本機構の広報誌である「COCODE !」もvol.6およびvol.7を発行しました。今後も編集委員として熊本県内の地域医療の魅力をお伝えできるよう努めてまいります。

最後に本年度は馬場秀夫機構理事長を始め、熊本大学のスタッフの皆様、熊本県医療政策課の皆様には多くのご指導・ご支援を賜りましたこと深く御礼申し上げます。また来年度も変わらぬご指導・ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

熊本大学病院

地域医療・総合診療実践学寄附講座

地域医療支援センター

荒木 智

熊本県地域医療支援機構／熊本大学病院 地域医療支援センター

〒860-8556 熊本県熊本市中央区本荘1-1-1

Tel:096-373-5627 Fax:096-373-5796

E-mail:chiiki-iry@kumamoto-u.ac.jp

HP:http://www.chiiki-iry-kumamoto.org/



熊本大学病院 地域医療・総合診療実践学専攻講座

〒860-8556 熊本県熊本市中央区本荘1-1-1

Tel:096-373-5794 Fax:096-373-5796

E-mail:chiiki-iry@kumamoto-u.ac.jp

HP:http://www.chiiki-iry-kumamoto.org/dcfgm/



令和5年度 活動報告書

熊本県地域医療支援機構 / 熊本大学病院 地域医療支援センター

熊本大学病院 地域医療・総合診療実践学寄附講座

地域医療連携ネットワーク実践学寄附講座

感染症対応実践学寄附講座

